

ビワ生育情報

千葉県
平成31年2月号

平成31年1月の気象

平成31年1月の半旬別気象は表1に示した。平均気温は第2半旬を除く5半旬で平年を上回った。月平均気温は6.6℃で、平年より0.6℃、前年より0.8℃高かった。また、第3及び第5半旬を除く4半旬では氷点下を記録し、氷点下日数の月合計は8日で、平年及び前年より2日少なかった。

最低極温は第1及び第2半旬を除く4半旬で平年を上回った。暖地園芸研究所ではビワの幼果が寒害を受ける-3.0℃以下を記録した日はなかった。

降水量は第6半旬を除く5半旬で平年より少なく、第1、第2、第4及び第5半旬では降雨がなかった。月合計は24mmで、平年の27%、前年の22%であった。

日照時間は第2半旬を除く5半旬で平年を上回った。月合計は206時間で、平年の121%、前年の107%であった。

表1 平成31年1月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃) ^{※1}		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	7.4	6.8	5.1	2	1.1	1	-0.4	-0.3	-0.6
2	5.7	6.3	7.8	2	1.5	1	-1.2	-1.0	-1.6
3	6.1	5.9	4.8	0	1.6	4	0.0	-1.1	-1.4
4	7.4	5.9	9.6	2	1.5	0	-0.3	-1.0	3.6
5	6.5	5.6	4.0	0	1.9	1	0.6	-2.0	-3.0
6	6.5	5.8	3.8	2	2.1	3	-1.0	-2.0	-4.4
平均/計/最低値	6.6	6.0	5.8	8	9.7	10	-1.2	-3.3 ^{※2}	-4.4

※1：各半旬又は1月中に記録した最低気温

※2：1月中に記録した最低極温の30年間平均値

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	0	12	2	44	28	37
2	0	22	70	26	28	33
3	6	13	0	28	27	40
4	0	12	25	38	26	18
5	0	16	14	34	27	33
6	18	14	0	36	34	32
合計	24	90	111	206	170	193

樹及び花房の発育

ビワの開花期は表2に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月1日で、平年より7日、前年より4日早かった。「大房」が11月17日で、平年より8日、前年より2日早かった。「田中」が11月5日で、平年より8日、前年より1日早かった。開花盛期は、「楠」が11月19日で、平年より8日、前年より4日早かった。「大房」が12月3日で、平年より16日、前年より8日早かった。「田中」が11月19日で、平年より15日、前年より3日早かった。開花終期は、「楠」が12月8日で、平年より17日、前年より5日早かった。「大房」が12月29日で、平年より30日、前年より18日早かった。「田中」が12月11日で、平年より28日、前年より8日早かった。

花房の出蕾は平年より早かったため、開花の進みは平年より早い。また、本年は開花期以降の気温が高く推移したため、果実の発育は平年より早く進んでいる。全体的に樹及び果房の生育は良いが、10月上旬の台風通過後に潮風害を被り、落葉がみられた樹は樹勢の低下が著しい。そのような樹は果房数を少なくし、樹勢の回復を図る。

表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 1	11. 8	11. 5	11.19	11.27	11.23	12. 8	12.25	12.13
大房	11.17	11.25	11.19	12. 3	12.19	12.11	12.29	1.28	1.16
田中	11. 5	11.13	11. 6	11.19	12. 4	11.22	12.11	1. 8	12.19

平年：1988年（昭和63年）～2017年（平成29年）の30年間の平均

3月の作業

ビワは厳寒期を過ぎて春が近づくと、枝葉の伸長が始まり、果実の肥大が急速に進む。しかし、春先は夜間に冷え込むことがあり、3月中旬頃までは寒波の襲来に注意する。3月になると台木の芽が動き始めるので、接ぎ木は3月中に行う。また、摘果や袋かけは寒波の襲来がなくなった頃から始める。

摘果・袋かけ

摘果・袋かけの作業は、3月以降、寒波の襲来がなくなる頃を見計らって、寒害を受けにくい園から始める。寒害を被った果実は、種子が少なく、形がいびつとなり、成熟前に落果することが多い。袋かけ作業をした後に寒害を被るとその果実が無駄になってしまうので、作業開始が早くなりすぎないように注意が必要である。一方、4月下旬以降まで作業が遅れ、果実の肥大が進むと擦れ傷、虫害などを被りやすくなるので、適期を逃さない様に行う。本年は果実の発育が平年より早く進んでおり、今後の気象次第だが、摘果・袋かけ作業の適期は短いと予想されるため、注意して取りかかっていたきたい。

標準的な着果程度は1果当たり20枚の葉が必要である。摘房が十分でない樹は最終的な着花房率が60%になるように摘房する。着果房数が多い樹では1果房に1～2果残し、着果房数が少ない樹では収量を確保するために3果以上着生させる。3果以上着生させると、葉枚数が適正でも果実が小さくなることもあるので、着果房数が少ない場合や個数を重視するときのみ着生させるようにする。

接ぎ木

接ぎ木の適期は、台木の芽が動き始める2月下旬～3月中旬であり、天気安定した時期を選んで行う。気温の低い日に作業すると、接木した苗の活着率が低下する。4月に入ると切り口から樹液の溢出が多くなり、接ぎにくくなるので、3月中に終わらせる。台木は接木部の直径が1.5cm以上のものを用いる。太いものほど活着後の生育は良いが、あまり太いものは取り扱いに不便である。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】

※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>